



沈 澱 藍

令和元年6月分

はじめに

今年は例年より1ヶ月早く藍を植えたので、早くも刈り取りを始めました。天候にも恵まれ、今年は順調に育っています。これからも穏やかな日々が続くことを祈っております。

沈 澱 藍 について

現在、日本における藍染めのほとんどは、すくもを使って行われています。

一方、インドや中国では、藍草の種類が異なるため、沈澱させて作る方法で行われています。私が最初に出会った藍染めは、この方法でした。自分で作ることができるので、自作の藍で20年も前から染めています。その中で色々な染め方を試みた結果、手描きができる事に大きな意義を感じ、作った沈澱藍のほとんどを手描き作品に使用しています。今回は色のバラエティを楽しむため、いろいろと実験を試みました。お送りした沈澱藍の量でも建てれば文字が書けます。私がお勧めしたい、一番の方法です。この方法・染め方は11月に解説しますので、今回はしっかり学んで良い沈澱藍を作ってください。

沈 澱 藍 の 取 り 方

沈澱藍の取り方を、2つの方法（A、B）に分けて解説します。

A

最初に紹介しますこの方法は、藍を多量に作った方に向きます。

（ガイドブック130頁～参照）

藍は朝露に濡れている間か、雨の日に刈ります。乾くと藍の成分が水に溶け出なくなるからです。二作目を取るために、根から10cm程残して刈ります。もちろん刈った後肥料をやります。雨の後など泥が付いていますのでさっと洗い流します。

ポリバケツの中に茎ごと葉を入れ、重ねて置きます。あまりギュウギュウ詰めにはしないのもコツです。茎や葉がかくれる程水を入れます。上から棒を組んだり網などを置き、その上に重石をします。漬け物の様に何個も重石をするのではなく、葉が水から顔を出さない程度で結構です。雨が入らなければ蓋をすることはありません。

4 8時間くらい経つと、液の色が濃い緑色に変化します。プツプツと泡が上に浮いてくる様になります。これが醗酵のしるしですから、棒で底の方をつついて、泡が出やすいよう促してやります。この大切なポイントを見 overs と、醗酵が過ぎて上澄みが濁ってしまいます。(写真A-1)

この時を見極めて重石を除けます。葉が黄変していますので、取り出します。これも畑の肥やしになりますが、藍独特の匂いに加えて、醗酵臭がしますので、大変な作業です。都会の中ではご近所に心配りのいる作業となります。残りの液は、ザルの上に布を置いてきれいに漉します。この中へガイドブックを参考にして石灰液を作り、入れます。(写真A-2) (写真は100ℓ容器に150gの石灰を入れています。容器が小さくなるほど石灰の割合を大きくします。)お風呂のかき混ぜ棒やカイで液を混ぜます。200~300回混ぜていますと、緑色が濃くなり、白い泡が出ます。1000回くらい混ぜると緑色だった液が急に青色に変わり、泡の色が青紫色になります。その途端、悪臭が良い匂いに変わります。不思議な現象です。(写真A-3)

注) 石灰は、水がかかったり古かったり、また農業用(苦土石灰)では使えません。

工業用消石灰を使ってください。

攪拌をやめて一日置きます。上澄みの色が茶色がかった透明な色になりますので、ポリ容器を倒すようにして少しづつ捨てていきます。大量の場合の攪拌は、ガイドブックのようにモーターを使用すると早くできます。いつまで経っても表面の色が緑色の時は、石灰を足してみてください。

ポリ容器の大半は上澄みですが、捨て口を見ているとスーッと紺の沈殿物が見えるようになると手を止め、静かに置きます。ある程度上澄みがなくなったら、透明のビンやペットボトルのような入れ物に移し換えて保存してください。

表面にカビが浮くことがあります。使用する時に取り除けば大丈夫です。何年も保存して使用できますが、乾燥してパラパラになる時があります。そうになると色が悪くなりますので、蓋をきちんとしてください。

リュウキュウ藍も同じように刈って水漬けにして使用します。藍の色素を含む量がタデ藍より多いので沈殿物が多く出来ます。なお、葉を取った後の茎は、さし木してまた殖やしてください。

B 塩もみの沈澱法

この方法は、最近発見した方法です。少量ずつ取ることが出来るので便利です。



また、臭いもしないのでお勧めします。

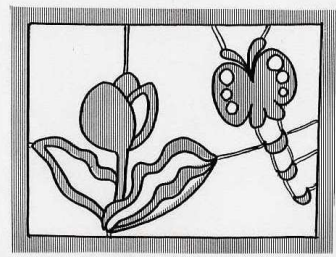
使用する藍生葉の量ですが、少ししか入手出来ない時は、500gから1kgでも結構です。葉を洗ってパットか桶などに入れ、荒塩を葉の4～5%振りかけます。水が少々入っている方が揉みやすいので、葉の5～10%くらいの水を入れます。余分な水分は後で捨ててしまいますので、分量は気にしないで結構です。

手袋をして揉みます。5～6分揉むと(写真B-2)のような青緑色になってきます。15分～20分たつと色が紺色に変わります。手を休めて絞ります。ナイロンストッキング等で手早く漉します。漉したカスに、もう一度10%の水を入れ、4～5分揉み、先に漉した液に足します。ステンレスのお鍋かボールに入れ、液を沸騰させます。火を弱めて10分程置

きます。液の色が、(写真B-3)のように赤味がかってきますので火を止め、冷まします。これを透明の容器に入れておきます。時間が経つと、沈澱してきます。上澄みは赤味がかかった色で、不要ですので捨てます。

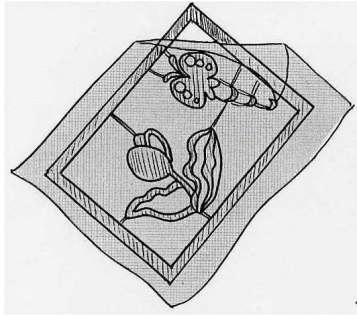
驚くほどインディゴ分は少ないのですが、第9回(11月分)で使い方を説明しますので、作った液を溜めておいてください。なお、あまり量が少ないと、液の赤味を出すために10分間弱火で煮ると、水分がなくなり焦げ付いたりしますので、水の量を多くして煮てください。なお、この方法は一番目に採れた藍で作ってください。

型染めの基本

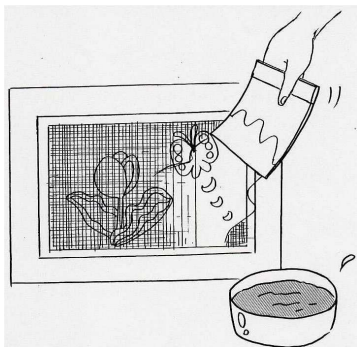


イラストI

型染めの基礎を説明します。ご希望の方はやって下さい。最近、型紙は化学紙が多く出ています。型紙の表にデザイン画をカーボン紙で写し、デザインカッターで切り抜きます。(イラストI)



イラストⅡ



イラストⅢ

紗を同じ大きさに切ってその上へのせ、カシュー法又はアイロン法で張り合わせます（イラストⅡ）。アイロンをかける時は上にあて紙（リケイ紙）をあて、低温でゆっくりかけます。これを乾燥させます。

麻布をのり板の上に置きます。あらかじめ型を濡らしておき、水気を切っておきます。その型を布の上に置きます。駒ベラを使って型用の糊をまんべんなく伸ばしておきます。（イラストⅢ） 糊は耳たぶと同じくらいの堅さに水で薄めます（糊1kgに水200cc）。糊置きが出来ましたら乾かします。

後日染め液が出来ましたら、布を水にさっと通して、雫を切り、静かに1分程入れて染めます。これを乾かして、また2度目を染めます。染める時間は、3～5分とだんだん長くしていきますが、途中で糊が流れないように乾燥させます。濃色にするには4～5回染めます。また沈殿藍で引き染めすることも出来ます。

染めあがった布は、熱い湯につけると10～15分で糊が取れます。水をかえてすすぎ洗いします。

注) 糊を使うときは晴天の日にしましょう。雨の日は、乾きが悪くカビがでて溶けてしまいます。

※参考 型のりや型紙、紗などは、田中直染料店(075-351-0667)でお尋ねください。

【 同封したもの 】

- 工業用消石灰 200g ※次回7月のテキストでも使います。
- 写真集 2枚（A4用紙に沈澱法④・⑤の写真を印刷したもの、型染め工程を解説したもの）

※沈澱藍の見本は11月に送付します。今回沈殿藍を作られた方は、自作の沈澱藍の使い方を11月に解説しますので、それまで暗い所に置いておいてください。（冷蔵庫でなくてかまいません。）